トリフォノフ、ザルツブルク音楽祭でCD発売イヴェント
――ショパンがテーマ

取材・文・写真＝中 東生
Text & Photo＝Shinobu Naka

ピアノを使った演劇のようなトリフォノフの演奏

8月8日、ザルツブルク祝祭大劇場近くのルドルフ・ブジャ・ギャラリーで、10月6日発売のダニール・トリフォノフ最新CDが発表された。〝Chopin Evocations〟というタイトルの通り、ショパンの作品とその存在に喚起されて生まれた作品を集めた2枚組だ。ドイツ・グラモフォンのクレメンス・トラウトマン社長直々の挨拶の後イメージ・ビデオが上映されたが、そこで、すでに胸がドキドキしてきた。髭を生やして大人の匂いを漂わせるトリフォノフが、ハリウッド俳優を思わせるからではない。時にはシクシクと痛いほど心に触れてくる演奏のせいだ。

その後登場したトリフォノフを2～3メートルの近距離で聴くと、その波動は感動を迫る。

ノスタルジックな微笑みを浮かべながら、その表情の通りの柔らかい響きでフェデリコ・モンポウ《ショパンの主題による変奏曲》を弾き始めた。冒頭では、無情に動くカメラマンが軋ませる木の床の雑音に気を削がれたりしたが、時には彼自身のアレンジかと思わせるほどの自由さで変奏が進み、そのうち一人の男の人生劇を見ているように感じられた。特に第6変奏で悪魔的な表情を見せた頃から、ピアノを使った演劇のようだった。第7変奏はいたずらっ子のように始め、第8変奏では始終目を閉じたままで、何か決意が感じられる。第9変奏でその決意が現実味を帯び、第10変奏で再び不吉な表情を見せ、第11変奏で自嘲的な笑いと共にクライマックスに到達した時の感情の塊など、狂気的にすら見える。そのめくるめくピアノの語りと彼の変幻自在ぶりにすっかり絆され、演奏後のインタヴューは色褪せてしまった。

モンポウを演奏するトリフォノフ。その演奏は駆けつけたファンを魅了した